

従属接続詞 *if* が導く節内に生起する 法副詞に関する一考察

藤田 郁

Abstract

This paper aims to show the actual cases of modal adverbs' occurrence in *if*-clauses in the Corpus of Contemporary/Historical American English. Some earlier studies indicated that modal auxiliaries and modal adverbs do not appear in *if*-clauses (conditional clauses). Other studies suggested that modal auxiliaries can be used in *if*-clauses if certain conditions are met. However, the conditions are not applicable to modal adverbs. Although modal auxiliaries and modal adverbs can both express the epistemic possibility/certainty of the utterer, modal auxiliaries do not always convey the speaker's phrenic attitude only. Additionally, it has been implied that some modal adverbs, such as *perhaps*, can occur with *if*-clauses. The modal adverb *perhaps* is used to "politely reduce the impact and urgency of questions and conditions, or convey an apologetic tone" (Quirk et al. (1985: 620)). However, when it occurs in *if*-clauses, it does not always seem to express possibility/certainty or reduce the impact and urgency. This research will give an overview and discuss the examples to explain the reasons and conditions why some cases allow modal adverbs in *if*-clauses.

Keywords : *if*-clauses, conditional clauses, modal adverbs, modality, hedge

1. はじめに

法副詞 (modal adverb ; *maybe*, *perhaps* 等 ; 以下 ModADV) は, 文頭に現れて文を修飾することができる。そのため, 従属接続詞 *if* の前におくことができる。しかし一方で, *if* 節内に ModADV を含む法要素は用いることができないとされており, 以下 (1) に挙げる例を目にする機会は限られている。現に, 文法書を見ても, *if* 節に関する項目で *if* 節内に生起する副詞について *only* 以外に言及, あるいは例文として提示している文法書は多くなく, 例えば Declerk (1991), 江川 (1991), 安井 (1996) 等を見ても, *if* 節内に *only* 以外の副詞が生起している例はない。本稿では, *if* 節内に生起する ModADV の中でも, *if* の直後に ModADV が現れる例を考察する。

- (1) a. I would enjoy it **if perhaps** we might exchange verse again... (COCA MOV 1998)

[副詞節用法]

b. So close, in fact, that I wonder **if perhaps** that's where I picked them up. (COCA ACAD 2016)

[名詞節用法]

(太字筆者。以下特記しない限り太字、下線は筆者による。)

Corpus of Contemporary American English (以下 COCA; 本稿では web 版を指す) で *if* + ModADV を検索しても、*if* やその他の ModADV の頻度に対して *if* + ModADV 型の頻度は決して多いとは言えず、中心的用法ではない¹⁾。しかし、Corpus of Historical American English (以下 COHA; 本稿で web 版を指す) のデータを見てみるとその頻度は近年増加傾向にある (COCA/COHA における頻度やその推移については3節で後述する)。

本稿では、*if* の直後に ModADV が現れる (1) のような [SV *if* ModADV sv] タイプに絞って、*if* 節内に生起する ModADV にはどのようなものがあるかをまず観察し、これまでの先行研究と照らしてどのように解釈、訳出するのが適当であるかを検討する²⁾。

また、ModADV をはじめとする副詞の分類方法及び *if* 節の分類方法や呼称は研究によって様々であるが、本稿では *certainly*, *surely*, *probably*, *maybe*, *perhaps*, *possibly* を ModADV として取扱う (Sweet (1891), Poutsma (1928), Curme (1931), Kruisinga (1932), Greenbaum (1969), Quirk et al. (1985), Biber et al. (1999) and Huddleston and Pullum (2002) 等)。Greenbaum (1969) では、副詞類を adjunct, disjunct, conjunct に分け、さらに disjunct を style disjunct と attitudinal disjunct に大別しており、本稿で扱う ModADV は、attitudinal disjunct に分類されている。*if* 節については名詞節、副詞節、open conditional, closed conditional 等の分類は必要に応じて使用する場合があるが、特筆する場合を除き「*if* が導く節」を総称して *if* 節と呼ぶ。なお、ModADV においても *if* clauses においてもその分類方法等を提示することを本稿は目的しない。

2. *if*-節内における modal 要素の可否

まず、*if* 節内における ModADV の生起について、例文の扱いも含め、言及されている先行研究を以下に示す。

Greenbaum (1969: 111), 郡司・鈴木 (1983:159) では、下記 (3) に見られるような、*wh*-word や *if* に導かれる間接疑問 (indirect questions) の節においてはほとんど (“most”) の attitudinal disjunct は「現れない」 (“may not appear”) と述べている。しかし、これでは本稿で扱う ModADV が間接疑問節内において生起可能であるかははっきりとは分からない。ここでの “most”, “may not appear” によって暗示されている例外 (間接疑問節で生起し得る ModADV) が、*perhaps*, *maybe*, *certainly*, *surely* であると明記されていないため、慎重に議論を運ぶ必要がある。

(2)

* He asked whether *disappointingly* they would leave early.

* He explained how *fortunately* they can leave early.

(Greenbaum (1969: 112); 斜字は原文通り)

一方で, “Possibly is an intensifier when it collocates with *can* or *could* in certain environments.” (Greenbaum (1969: 148)) とし, その “certain environments” には先に挙げた *wh-* に導かれる間接疑問節と, *if* に導かれる条件節があるとしている (= (4))。しかし, (4) c-d. にある類似文では, *possibly* の位置に *probably* が来ると非文であるとされているため, *probably* は先に挙げた *if* 節内に生起しない ModADV であり, *possibly* は例外だと推測される。

(3)

a. I asked whether they could *possibly* leave early.

(彼らが本当に早く出発できるかと私はきいた)

b. If they can *possibly* leave early, they will do so.

(何とか早く出発できれば彼らはそうするだろう)

c. * I asked whether they could *probably* leave early.

d. * If they can *probably* leave early, they will do so.

(Greenbaum (1969: 148-149); 日本語訳は郡司・鈴木 (1983) による: 斜字は原文通り)

しかし, ここで問題とされているのは, *possibly* と *can/could* の共起についてであり, またこの *possibly* の生起位置は助動詞 *can* と本動詞 *leave* の間であるから, 本稿の考察対象である [SV *if* ModADV sv] と同列に比較できるわけではない³⁾。

if 節内の ModADV についての研究が多く見られない一方で, *if* 節内の法助動詞については様々な領域において比較的議論が活発である (Sweetser (1990), Dancygier and Sweetser (2005), 澤田 (2018) 等)。

Haegeman (2010: 603) は “It has often been observed in the literature that “high” modal markers, such as expressions of speech act modality (22a), evaluative modality (22b), evidential modality (22c) and epistemic modality (22d-e), are incompatible with conditional clauses.” と述べている。以下 (5) a. b. に, Haegeman (2010: (22d-e)) に提示されている例を示す。

(5)

a. * If George **probably** comes, the party will be a disaster.

(Haegeman (2010: 603): (22d))

b. * John will do it if he **may/must** have time.

(Haegeman (2010: 603): (22e); Declerck and Depraetere (1995:278) からの引用)

(5) a. においても (非文ではあるが) ModADV の *probably* は *if* の直後ではなく, *if* + NP + *probably* + V (P) の語順で現れている。

しかし, 如何なる場合においても *if* 節内で法助動詞が用いられないわけではない。例えば, 江川 (1991: 257) では, 法助動詞 *should* が「単なる条件の *if* 節に使われて」(直説法 *if* 節)「実現の可能性が少ないと思う話者の気持ちを表す」とし, 例を挙げているが, ModADV の例は挙

げられていない^{4) 5)}。

澤田 (2018: 39-42) では、内容条件文 (content conditional) と認識条件文 (epistemic conditional) それぞれにおいて、*if* 節内に法助動詞が生起できる条件を説明している。まず内容条件文では、「助動詞が認識的意味の場合、原則として [...] *if* 節内には生じない」としている (= (6) a.b)。認識的条件文とは、Sweetser (1990) によって以下のように説明される条件文であり、澤田 (2018: 41) では日本語では「…というのなら」に相当するとしている⁶⁾。

“In the epistemic domain, ‘if-then’ conjunction expresses the idea that knowledge of the truth of the hypothetical premise expressed in the protasis would be a sufficient condition for concluding the truth of the proposition expressed in the apodosis.”

Sweetser (1990: 114)

澤田 (2018) は、この認識的条件文においては認識的法助動詞が *if* 節内に自由に生起できることを Sweetser (1990), Dancygier (1998), 澤田 (2006, 2014) を基に指摘している (= (7) a. b. c.)。

(6) [内容条件文]

- a. If John *must* take drugs, I will give him the money for them. [義務・必要 (= R)]⁷⁾
 (=もしジョンが薬を飲まなければならなくなったら、私は彼にそのお金をあげよう)
 (= *もしジョンが薬を飲んでいるに違いないのだったら、私は彼にそのお金をあげよう) [必然性・推量 (= E)]
 (澤田 (2018: 40): (2a-b); as cited to Jenkins (1972: 53); 斜字及び日本語訳は原文通り)

- b. If John *may* be examined by the doctor tomorrow, I will be eternally grateful. [許可 (= R)]
 (=もしジョンが明日その医者に診察してもらってもよくなったら、私はいつまでも感謝します)
 (= *もしジョンが明日その医者に診察してもらうかもしれなくなったら、私はいつまでも感謝します)

(澤田 (2018: 40): (3a-b); Jenkins (1972: 177) からの引用;
 斜字及び日本語訳は原文通り)

(7) [認識的条件文]

- a. If it *may* rain today, we'd better buy rubber boots⁸⁾. (= E)
 (今日は雨になるかもしれないというのなら、長靴を買わないと大変なことになるよ)
- b. If he *might* object, I won't ask him. (=E)
 (彼が反対するかもしれないというのなら、彼に頼むのはやめにしておこう)

c. If John *must* know the answer, why don't you ask him? (= E)

(ジョンが答えを既に知っているに違いないというのなら、彼に聞いてみたらどう?)

(澤田 (2018: 41 (4)-(6)); Jenkins (1972: 186) からの引用; 斜字は原文通り)

この (6), (7) の法助動詞を筆者が ModADV に置き換えた文 (置き換えた上で節を移動させたものを含む) を (8) に示す。(6), (7) にある法助動詞 *must* → *certainly*, *may/might* → *maybe/perhaps* にそれぞれ置き換え, 文によっては ModADV を文頭に出す, *if* 節を主節の後ろにおくなど文の構成を変えたこの (8) の 7 文を英語母語話者のインフォーマントに見せ, 判断を仰いだ結果が表 1 である。

(8)

- a. If **certainly** John takes drugs, I will give him the money for them. [(6) a.]
- b. If **maybe/perhaps** John will be examined by the doctor tomorrow, I will be eternally grateful. [(6) b.]
- c. If **maybe/perhaps** it rains today, we'd better buy rubber boots. [(7) a.]
- d. **Maybe/perhaps** if it rains today, we'd better buy rubber boots. [(7) a.]
- e. We'd better buy rubber boots if **maybe/perhaps** it rains today. [(7) a.]
- f. If **maybe/perhaps** he objects, I won't ask him. [(7) b.]
- g. **Maybe/perhaps** if he objects, I won't ask him. [(7) b.]

([] 内は対応する例文番号)

表 1. 例文 (8) のインフォーマント調査結果

	インフォーマント A	インフォーマント B	インフォーマント C	インフォーマント D	インフォーマント E
(8) a.	*	*	*	*	*
(8) b.	*	*	*	*	*
(8) c.	*	*	*	*	*
(8) d.	*	*	*?	*	*
(8) e.	*	*	*	*	*
(8) f.	*	*	*	*	*
(8) g.	*	*	*?	*	*

(8) d. 及び (8) g. について, インフォーマント C は, 「文頭に *maybe* があると, *if* の内容ではなく主節に *maybe* がかかっているように読めるため迷うが, 個人的には非文としたい」とコメントした。この点を除いては全てのインフォーマントが (8) を非文であると判断し, そして全てのインフォーマントが「*if* と *maybe* を同時に使う (= 共起させる) のはおかしい」と述べた。(8) a-b. は, 元の例文 (8) a-b. が内容条件文であり, 法助動詞が持つのは根源的モダリティであり, 認知的モダリティではない。一方で, ModADV *certainly*, *maybe* は根源的モダリティを表さず, 認知的モダリティに特化した表現であるため, (8) a-b. は非文となると考えられる。

(8) c-g. の例文は, 対応する (8) の例文が全て認知的条件文であり, 法助動詞は認知的モダ

リティを表す要素として文を構成している。(8)で置き換えた *maybe, perhaps* が認識的モダリティのみを表すのであれば、(8)の法助動詞と(8)c-g.のModADVの持つモダリティに相違はなく、この点から考えれば適格な文となりそうであるが、実際にはほぼ非文である。これは一つに(8)の例文で用いられている法助動詞が、認識的モダリティ以外に「相手が述べた内容をエコー」(澤田(2018: 41))する働きがあるからだと考えられる。澤田(2018: 41)によれば、これら(8)の認識的条件文における *if* 節の中には、「相手の発話・思考の内容が埋め込まれており、対する主節では「現在時における話し手の心的態度や言語行為が表されている」。つまり、認識的モダリティを持つ法助動詞は使われているものの、それら法助動詞は「相手の発話・思考の内容」を伝達する機能を果たしており、発話者の心的態度を表しているわけではない。ModADVはこの法助動詞が持つ機能を持っていないために、(8)c-g.は非文になると推測される。

(8)の例文の後に、追加して(10)の例文(COCAからの例文(9)を基に筆者が作例したもの)について文法性判断を依頼すると、興味深い結果が得られた。

(9) I think it would be prudent **if maybe** we met and talked. (COCA MOV 2013)

(10) It would be prudent **if maybe** we met and talked. ((9)を基に筆者作例)

(10)は、(8)の例文と同様に *if* と *maybe* が隣接しているにも関わらず、どのインフォーマントも皆「可能であり、とても自然・流暢な英語」という判断であった。このことから、そして類似した例がCOCAに一定数見られるということは、*if* 節に法要素であるModADVが生起することは、先に挙げた先行研究に反して(何らかの条件を従えて)可能でありそうだと言える。

以下では、古賀(2009)及びQuirk et al.(1985)の二つの研究を通して、*if* 節内に法要素であるModADVが入り得る条件及び可能性について概観する。

古賀(2009: 1109)は、認知文法の観点からModADVの用法について文副詞の下位分類にModADVをおき、評価副詞や態度副詞と合わせ、「いずれも事態認識や発話態度と関係しているため、[...] 挿入的に用いられる場合を除けば、グラウンディング表現に隣接する位置か、または、文頭・文末の、文の中核部分からは区切り出された位置(つまり事態描写の外側)におかれることが好まれる。」と述べている⁹⁾。また、ModADVの「事態描写は必ずしも現実スペースの中に位置づけられていなくてもよく、[...] 想定や推測などであってもよい。さらには、反実仮想スペース(counterfactual space)の中に位置づけられていてもよい。但し、《主張》という発話態度を欠く文、例えば疑問文では[...] 容認されない」(古賀(2009: 1112))とし、(11)a. b.に挙げるBellert(1977)の例文を引用している。

(11)

a. If John were sane, he would {probably/certainly/evidently} accept the offer.

(Bellert (1977: 345); 古賀 (2009: 18) (25) a.)

b. * Has John {probably/certainly/evidently} come?

(Bellert (1977: 343); 古賀 (2009: 18) (25) b.)

この、ModADV の事態描写が「想定・推測・反実仮想スペース」の中であればよく、「《主張》という発話態度を欠く」場合には容認されないという点は、*if* 節内に ModADV が生起することを可能にする条件の一つになり得るのではないかと考えられるが、上記 (11) a. では ModADV が *if* 節内ではなく主節にあることから、この事実のみを ModADV が *if* 節内に生起できる条件とするのは早計であろう。

Quirk et al. (1985: 620) では、“Such items as *perhaps* and *by any chance* politely reduce the impact and urgency of questions and conditions, or convey an apologetic tone[.]”として、以下 (12) の例を挙げている。

- (12) If Mary is (perhaps) at liberty, I could see her for a moment (perhaps).
(Quirk et al. (1985: 620))

この例は *if* 節内に *perhaps* が生起できることを暗に示していると読める。しかし、先に挙げた Greenbaum (1969) や Sweetser (1990) などの、*if* 節内には法要素を生起させることができない(場合がある)という指摘に *perhaps* や *by any chance* が反することができるという明確な要因及び条件は述べられていない。

3. *if*-ModADV の COCA/COHA における出現頻度

2 節では、文法書や先行研究を通じ、*if* 節内で使用される ModADV 及び法要素の解釈や容認性の違いなどに関して議論してきた。本節では、コーパスを用いた調査を通じ、*if*-ModADV の頻度が、共時的に見てどのジャンルにおいて多く見られるのか、及び通時的に見てその頻度が増加傾向にあるのか、減少傾向にあるのかを概観する。以下に用いる COCA 及び COHA の頻度は、特に断りがない場合は 100 万語あたり (Per Million Words; 以下 PMW) に計算された相対頻度である¹⁰⁾。

3.1 COCA における語 (句) の共時的出現頻度

はじめに、COCA における *if* の頻度を表 2 に示す。最も多いのは表左にある BLOG における頻度であり、表の右側に進むにつれその頻度を下げ、ACAD (ACADEMIC) ジャンルの頻度が最も低くなっている。

表 2. *if* の COCA における頻度 (ジャンル別)¹¹⁾

	BLOG	WEB	TV/M	SPOK	FIC	MAG	NEWS	ACAD
<i>if</i>	3618.86	3456.79	3342.63	3066.29	2768.35	2296.69	1856.71	1314.41

次いで表 3 に挙げるのは、ModADV の *maybe*, *perhaps*, *possibly*, *probably*, *certainly*, *surely* のジャンル毎の頻度であり、図 1 はこの表をグラフ化したものである。

表3. 各 ModADV の COCA における頻度 (ジャンル別)

	BLOG	WEB	TV/M	SPOK	FIC	MAG	NEWS	ACAD
maybe	378.88	266.96	957.97	430.23	621.9	161.32	150.08	28.62
perhaps	227.67	207.78	109.2	169.93	260.26	199.88	148.51	224.05
possibly	84.33	75.59	48.05	66.42	53.62	49.21	42.03	47.07
probably	358.82	295.37	317.03	388.34	268.82	220.98	187.72	123.48
certainly	187.73	147.28	76.21	307.84	98.99	100.66	95.31	92.91
surely	48.13	42.48	20.08	14.59	66.75	31.75	21.43	28.15

これら六つの ModADV の中で総合して頻度が最も多いのは *maybe* であり、TV/M のジャンルでの頻度が特に際立っている。その他のジャンルでも総じて他の ModADV より頻度が高いが、MAG, NEWS, ACAD になるとその頻度を下げており、formal な場面や written では使用されることが少なく、口語に近いジャンルや informal な場面において使用される傾向が見える。*maybe* に次いで頻度が高いのは *probably* である。*maybe* ほど数値の変動は少ないものの、NEWS, ACAD になるとその頻度は他のジャンルに比べ低い。

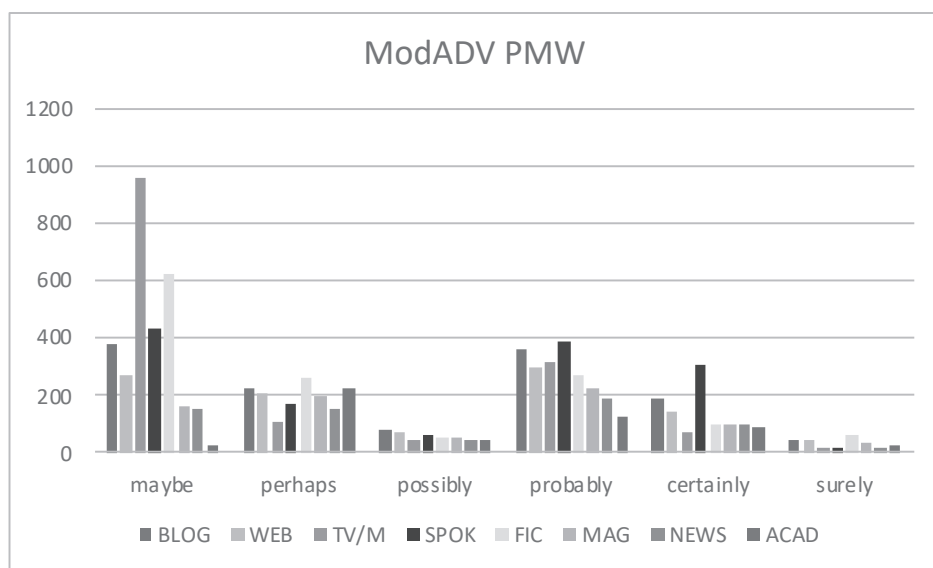


図1. 各 ModADV の COCA における頻度 (ジャンル別)

表4及び図2では、*if*の直後に ModADV が生起するパターンの頻度を示す。表3で示した ModADV の頻度と比べてみても、その頻度が軒並み低いことが分かる。特に、確信度が高いと言われる *surely*, *certainly*, 次いで *probably* はコーパス内に例が確認されないジャンルが多い¹²⁾。表中は相対頻度の数値を用いているが、粗頻度を確認したところ、相対頻度 0.01 の場合は粗頻度 1 であり、10 億語近いトークンを有するコーパス内で一度しか使われていないということになる。

表 4. *if*-ModADV の COCA における頻度 (ジャンル別)

	BLOG	WEB	TV/M	SPOK	FIC	MAG	NEWS	ACAD
<i>if maybe</i>	0.65	0.64	3.15	1.23	2.57	0.25	0.20	0.09
<i>if perhaps</i>	0.52	0.42	0.17	0.40	1.01	0.26	0.20	0.28
<i>if possibly</i>	0.04	0.06	0.02	0.05	0.05	0.01	0.01	0.02
<i>if probably</i>	0.03	0.02	0.00	0.02	-	-	-	-
<i>if certainly</i>	-	0.01	-	-	-	-	-	0.02
<i>if surely</i>	-	-	-	-	-	-	-	-

比較的同等の確信度を持つ *maybe*, *perhaps* がこの中では頻度が多く, *maybe* 自体の頻度が他の ModADV よりも高かったことを考えれば順当であるようにも思われるが, *maybe* の次に頻度が多かった *probably* は *if probably* となるとほとんど例が抽出されず, ModADV の持つ epistemic possibility の差が *if* との共起に何らかの影響を与えているのではないかと推測する。

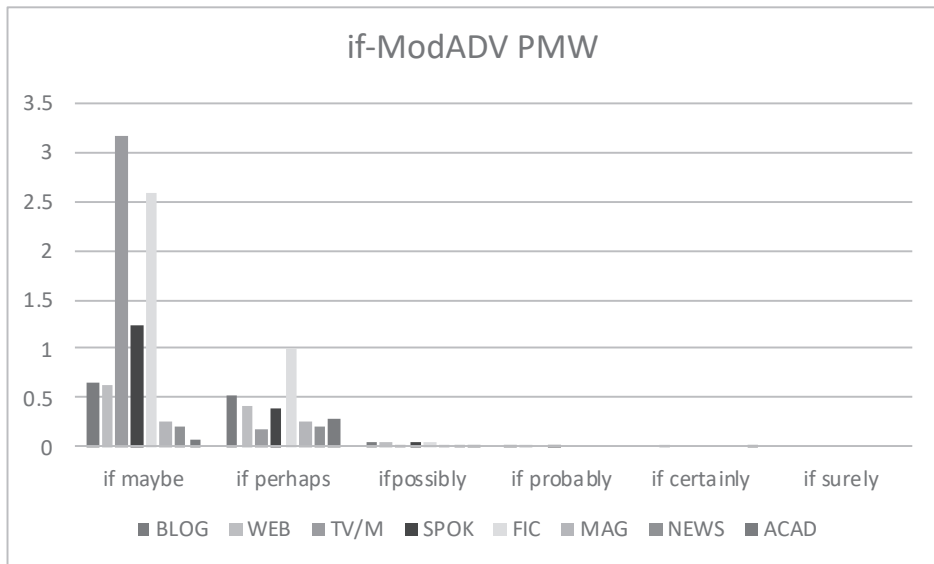


図 2. *if*-ModADV の COCA における頻度 (ジャンル別)

上記検索では *if* の直後に ModADV が生起する全ての例が抽出され, 中には *as if / even if / what if* のように *if* の直前に生起する語が *if* と結びついて一つの意味を成すパターンも抽出されている。*as/even/what if* ModADV が上記に示した *if* ModADV の頻度の何割かを示したものが以下の表 5 である。*if maybe* では合計して 6.50%, *if perhaps* では 合計 7.81% が *if* の直前に *as/even/what* のいずれかが生起するパターンであることが分かる。

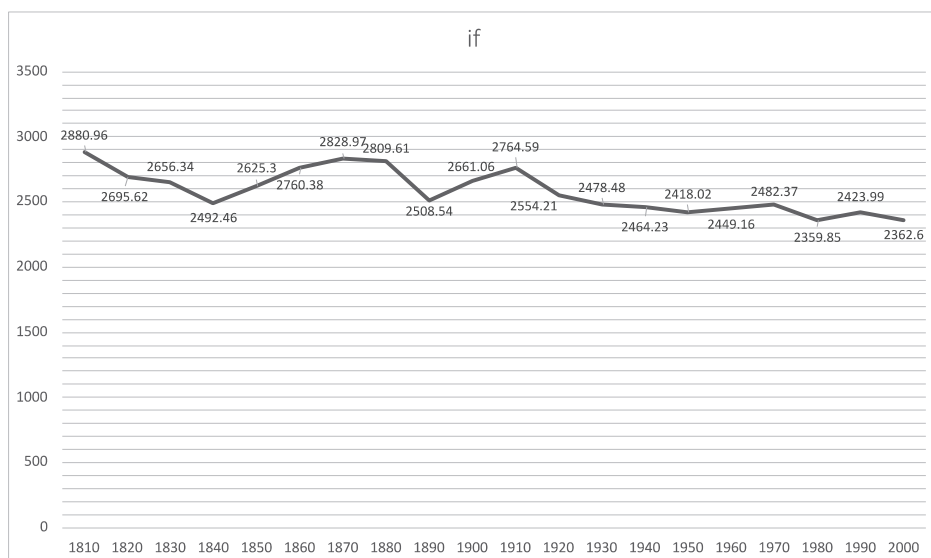
表5. *as/even/what if-maybe/perhaps* の COCA における頻度

	粗頻度 (全ジャンル)	相対頻度 (全ジャンル)	<i>if-maybe/perhaps</i> の相 対頻度 (全ジャンル)	<i>if-maybe/perhaps</i> 相対 頻度中の 割合 (%)
<i>as if maybe</i>	58	0.06		5.31
<i>even if maybe</i>	7	0.01	1.10	0.64
<i>what if maybe</i>	6	0.01		0.55
<i>as if perhaps</i>	21	0.02		5.29
<i>even if perhaps</i>	7	0.01	0.40	1.76
<i>what if perhaps</i>	3	0.00		0.76

ここで見た *as/even/what if* ModADV 型は本稿での考察には含まないが、特にこの中でも *as if* ModADV が *if* ModADV に占める割合が最も高い点など、今後さらに研究を進める際に留意及び詳細で正確な分析を施すべき点である。

3.2 COHA における語 (句) の通時的出現頻度

次に、COHA を用いて 3.1 節において ModADV の中でも頻度が高かった *maybe*, *perhaps* の 2 つの ModADV に限定し、*if* の頻度推移 (図 3) と ModADV 単体の頻度推移 (図 4 左), *if* ModADV 型の頻度推移 (図 4 右) を比較する。

図 3. *if* の COHA における相対頻度推移 (10 年毎)

if は、図 3 のグラフから分かるように、1810 年代から 2000 年代まで大きな増減がない。

maybe は、藤田 (2020: 89) で指摘されたとおり、1890 年代から 2000 年代にかけて右肩上がりで推移している¹³⁾。*perhaps* は、1810 年代から 2000 年代にかけて緩やかにその頻度が減少しているようにも見えるが、*maybe* ほどの急激な頻度の増減は認められないことが、図 4 左 から分かる。

従属接続詞 *if* が導く節内に生起する法副詞に関する一考察（藤田）

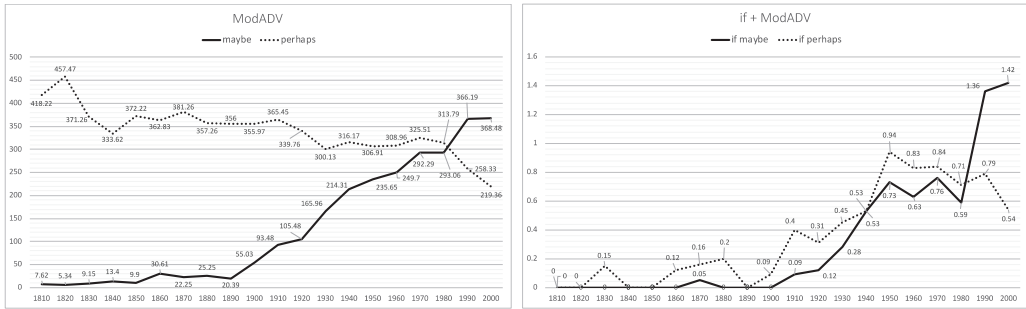


図 4. (左) *maybe* と *perhaps* の COHA における相対頻度推移 (10 年毎)
(右) *if-maybe* と *if-perhaps* の COHA における相対頻度推移 (10 年毎)

図 4 左と図 4 右を比較すると、*maybe* の頻度が上がっていくのに呼応するかのようには *ifmaybe* の頻度が増えている（実線）。1890 年代を境に頻度が増えている *maybe* とは異なり、*perhaps* の頻度は 1810 年代から大きく増加せず緩やかに減少しているが、*ifperhaps* は *ifmaybe* と同様に 1900 年代から右肩上がり推移している（図 5）。これらのグラフから言えることは、*if* の頻度は 1810 年代から 2000 年代まで大きく変わっておらず、*maybe* は頻度が増加傾向、*perhaps* はやや減少傾向にあるにもかかわらず、*ifmaybe* と *ifperhaps* の頻度は、1900 年代以降増加傾向にある。

if と共起する ModADV の頻度は 1900 年代を境にそれ以前よりは増加していることが分かった。特に *ifmaybe* は、*maybe* 自体の頻度が増加するに伴って *ifmaybe* の頻度も増加しているように見えるが、「*maybe* が多く使用されるようになった（出現頻度が増えた）」という事実が *if* 節内に ModADV の生起を許す直接の要因とは言えない。

4. COCA で確認される *if-ModADV* の実例とその考察

本節では、3 節のコーパス調査から見つかった用例を使い、*ifModADV* がどのように用いられているか、COCA にある *ifmaybe/perhaps* の具体的な例を挙げながら考察する。

(13) に示す例文は、統語論の観点から見ると *if* 以下の内容を“okay”と思うか否かを聞いている疑問文だが、語用論の観点から見ると、文の趣旨は「一晩泊めてくれないか」という依頼表現である。

(13) [SV, *if maybe* sv]

Do you think it would be okay **if maybe** I spent the night, Tonight?

(COCA MOV 2012)

(できましたら今晩一晩泊めていただきたいのですが、よろしいでしょうか?)

(日本語訳筆者)

『ジーニアス英和大辞典』では、略式で丁寧な依頼・提案表現として「できましたら」という「助

動詞や *if* 節と共に表現を和らげるのに用いる」(s.v. *perhaps*, *adv.* 3) と記述されており、用例に “Perhaps if you rang me when you got back to your house? (家に戻ったら電話をいただければありがたいのですが。)” をあげている。用例の通り、ModADV である *perhaps* は文頭におかれており、文副詞として機能している可能性が高く、*if* 節内に ModADV が生起することを支持する根拠とはならない。しかし、この (13) の例文は、先にも述べたとおり依頼表現であり、*perhaps* と *maybe* の語の違いと、ModADV の生起位置の違いはあるが、(13) の *maybe* は『ジーニアス英和大辞典』の *perhaps* 同様の働きをしていると考えられる。『ジーニアス英和大辞典』にある日本語の「できましたら」を使用しても、主節とも違和感なく訳出できる ((13) 日本語訳参照)。

次に、(14) を見る。

(14) [SV, *if maybe* sv]

a. We want to tell you again what happened **if perhaps** you were just joining us.

(COCA SPOK 1996)

b. Figured I'd be likely to give him a hand, **if maybe** he needs it. (COCA FIC 1991)

c. AF[Auto Focus] speed remains excellent, **if perhaps** fractionally faster than the last generation. (COCA BLOG 2012)

(14) a. の文では、依頼や提案表現とも取れなくはないが、主節の “We want to tell you again what happened” から考えると *if* 節は「あなたが加入してくれるなら」という条件を示しており、(14) b-c. も同様に *if* 節以下は条件を提示している。ここから、*maybe/perhaps* は *if* 節内に表される内容 (条件) に対する話者の心的態度を示していると考えられる。

(15) も (14) とほぼ同様の例であるが、*if-maybe* の後 (あるいは *if* と *maybe* の間) の sv が省略されている¹⁴⁾。“she” と “Bobby Duncan” が “she had managed finally to do it” と「願っていた (*hoped*)」のは「おそらく別の理由からであったが」という narrator の心情を表している。

(15) [SV, *if maybe* (sv)]

Both she and Bobby Duncan hoped she had managed finally to do it, **if maybe** for different reasons. (COCA FIC 2011)

以下 (16) の例も同じく sv が省略された *if* 節の *if* に *possibly* が続いており、narrator の「ひょっとしたら Darth Maul はおしゃべりかもしれないが」という心的態度を表している。

(16) [SV, *if possibly* (sv)]

Darth Maul, my crosswalk buddy, was probably a very nice guy, **if possibly** overtalkative. (COCA FIC 2009)

(17) は、節の順番が (13)-(14) とは入れ替わり、*if* 節 → 主節の順になっているが、ModADV は *if* の前には出ていない例である。

(17) [*If maybe* sv, SV]

Verstappen said: “**If maybe** you say Baku again, I think at one point the team will may be [sic] tell us to calm down a bit and just follow each other, in the last few laps, I don’t know. (COCA MAG 2018) (下線筆者)

節の順番が変わっても、(15) と同様に *if* 節で条件を提示しているその条件の可能性、その条件が満たされることへの話し手 (“Verstappen”) の確信度を *maybe* が表しているように読める。この文は直接話法で記されているため限りなく口語に近い文だが、雑誌に掲載されていることから、“Verstappen” が実際に発話した文を一字一句相違なく書き起こしていない可能性もある。しかし、この文では *if* の直後に *maybe* が残されている。また、語順が *if-maybe* であってもこの *maybe* は文修飾に用いられている (*if* と語順が入れ替わっている) 可能性への反証として、(17) の下線部が挙げられる。下線部は主節の中に位置しており、分ち書きされているものの直前に助動詞 *will* があることから、*maybe* は副詞であろう。もし、*if* の直後にある *maybe* が文修飾の働きをするのだとしたら、主節内に同じ *maybe* が生起する必要はなく、冗長な表現として避けられるのではないか。先に述べたように、特に口語では書き言葉よりも語順が統語的規則に従っていない場合が多いが、雑誌として文字に書き起こす時点で、雑誌の読者の理解を妨げる要素は除去されるか修正される可能性もある。それにもかかわらず従属節と主節にそれぞれ *maybe* が生起しているということは、*if* の直後にある *maybe* は *if* 節にかかっていると言えるのではないかと考える。

次に挙げる (18) は、*if*ModADV の ModADV が *probably* の例である。「Al Franken がアジア系アメリカ人をからかっている録画があるが、もしこれが共和党議員だったら – もし (*probably*) Trent Lott 上院議員や他の誰かだったら、十中八九政治活動に影響を及ぼしますよね。」という趣旨の文であるが、上記 (17) と同じく、主節にも *if* 節と同じ ModADV, *probably* が使用されている。

(18) [*If sv – if probably* sv, SV]

And that is Al Franken making fun of Asian-Americans. Now, if this was a Republican and that tape came out - **if probably** it was Sen. Trent Lott or anybody else, it would probably kill their campaign. How big a reaction is that tape getting and do you think it will have an impact on the race? (COCA SPOK 2008)

if 節で条件を提示しているのは (17) と同じであるが、(17) では「今後 you say Baku が再び (again) 起こるとしたら」、という現在・未来の不確実な事柄について言及しているのに対し、(18) では過去 (と現在) の事実と反することに言及しており、「Al Franken と同じことをもし Sen. Trent Lott (や他の議員) がしたら」という条件を提示しているにすぎない。つまり、この

probably は *if* 節で表される条件が今後現実になる可能性に対する話者の心的態度を表しているのではなく、“or anybody else” と共に条件が適応される対象が “if it was Sen. Trent Lott” とすると “Sen. Trent Lott” のみに限定されてしまうのを防ぐ働きをする、ヘッジ表現のような役割をしているのではないかと考える¹⁵⁾。

(19) は主節内に別の ModADV, *probably* が用いられている例である。主節内に *probably* が生起しているため、*if* の直後にある *maybe* は、*if* 節内にかかっていると解釈するしかない。*if*ModADV が仮に本来文頭にくるべき *maybe* が何らかの理由で *if* と入れ替わった、というのであれば、*Maybe if* sv SV. の *maybe* は文副詞として文全体を修飾する。文全体を修飾するのであれば、主節に同じ ModADV で epistemic possibility の度合いが異なる *probably* が入るとその認識に矛盾が生じてしまう。

(19) [S (*probably*) V *if maybe* sv] / [*if maybe* sv, S (*probably*) V]

a. And I contend that the old welfare system probably would have worked **if maybe** we would have stepped up to some of the other job training aspects and the day care components and necessities. (COCA SPOK 1996)

b. “And, she eventually adds, **if maybe** they take on all the three-stars on consecutive nights, her boyfriend will probably pay for it all. # [sic] (COCA NEWS 1997)

if が導く名詞節に ModADV がくる例を (20), (21) に挙げる。(20) は、「できればあなたが助けてくださらないか」＝「助けてください」を丁寧に述べており、(13) と同様に依頼表現であると考えられる。

(20)

I am spared more because she folds her thin hands in front of her and says, “I have a problem and I wonder **if maybe** you could help me?” (COCA FIC 1990)

一方で (21) の例文には依頼の要素は含まれておらず、*if* 節以下が真であるか否かを提起している。

(21)

a. I wonder **if maybe** that is not a crazy thing we could look at ourselves, more cross-border regions. (COCA ACAD 1997)

b. But the thought does inspire me to check my messages, to see **if perhaps** my sphinx is an electronic courier. (COCA MAG 2003)

c. I was wondering, when you got there, **if possibly** you'd like to hang out with me while

I was there? (COCA MOV 2015)

この、動詞の目的語となる名詞節の *if* 節で特に興味深いのが、用いられている ModADV が表す (epistemic) possibility は節全体にかかっているのか否か、という点である。

一般的に、*if* (あるいは *whether*) 以下の表す内容は、日本語では「～かどうか」と訳出されることが多く、(22) に挙げるように、「行く (go)」か「行かないか」の二者択一の様相を示している。

(22) I'm still wondering **whether/if** I should go myself **or** (I should) send a substitute.

(自分で行くべきか代理を出すべきかで、まだ迷っています)

(江川 (1991: 383, (3) C.))

この様相を先出の例文に当てはめて考える。例えば (21) a. では「that が a crazy thing ではない」と「that が a crazy thing である」の両極の間で判断しかねている (“wonder”) と考えられるが、ここに *maybe* が生起することによってこの *maybe* が表している心的態度が両極にかかっているのか、それともある一方のみにかかっているのかが不明である。ただ、「真か偽か」のいずれにも *maybe* の持つ possibility が作用するとすると、この文の発話者は真と偽以外の第三の可能性を考慮していることになり、論理的に説明がつかない。(「行くか」「行かないか」「代理を立てるか」で迷う場合、第三の可能性があるように見えるが、「自分が行く」か「行かないか」は二者択一にしかならず、「代理を立てる」はあくまで「行かない」選択をした上で発生し得る可能性である。) 以上を考慮すると、(21) (22) にある *if* 節を発話する段階で、発話者は二者のうちどちらかに判断が偏っているものの、断言しきれないために対極を示すことのできる *if/whether* を用い、かつ ModADV を用いて自分の (両極のうち偏った方の) 判断を和らげようとしているのではないだろうか。つまり、(21) a. では発話者の認識ではまず “that is not a crazy thing” 「だろう (= *maybe*)」という認識があり、そこに断言できない不安や疑念が残るため発話者の認識に反する例を挙げられる、“I wonder if” を (ヘッジ表現として) 用いていると考える。

本節では COCA の例文をいくつか観察してきたが、ここまでで言える事は、2 節で触れた、*if* 節内に法要素を持つ ModADV が生起することは、先に挙げた先行研究に反して (何らかの条件を従えて) 可能でありそうだということだ。2 節で引用した Quirk et al. (1985: 620) の “Such Items as *perhaps* and *by any chance* politely reduce the impact and urgency of questions and conditions, or convey an apologetic tone[.]” という点、及び考察の結果を概観し、*maybe* や *perhaps* はある種のヘッジ表現として、節の内容 (に対する話し手の心情や認識の表出) を曖昧にする目的で使用されているのではないかと推測する。また、*if-maybe*、*if-perhaps* の例が多く、他の ModADV の用例が少ないことから、*maybe*、*perhaps* が使われやすい何らかの要因 (あるいは *maybe*、*perhaps* 以外の ModADV が用いられにくい要因) を今後検討する必要がある。また、*if* 節内に ModADV が生起する場合の条件が明確ではなく、なぜ先行研究に反してこれらの例が容認されるのか、という確証には至っていないため、今後の課題とする。

5. おわりに

本稿では、*if*の直後に ModADV が生起する例を COCA 及び COHA を使用して概観した。先行研究では、ある条件を除いて *if* 節内に modality 要素は生起できないとされているが、そこでは触れられていないパターンかつ条件下で *if* 節内に modality 要素である ModADV が生起する例があることを示した。先行研究に反して *if* 節内に ModADV が生起できる条件と要因を体系的に明示することを今後の課題とする。

注

* 本稿の執筆に際し、三野貴志さん（長崎純心大学）より草案の段階から多くの有益なコメント、ご指摘、ご助言を賜り心より感謝申し上げます。また、ご助言・ご協力をいただいた徳永和博氏、Arlet Schmidt 氏、Carolyn Butler White 氏、Matthew Rosenau 氏、Natsumi Rosenau 氏、そして匿名のインフォーマントの皆さまにも心より感謝申し上げます。なお、本稿の不備・誤りは全て筆者に帰責する。

- 1) web 版を使用しているため、検索方法は検索ウィンドウに 'if maybe', 'if perhaps' 等、半角スペース区切りで if と各 ModADV を入力して検索した。以下同様。
- 2) 本稿では、アルファベット大文字 SV によって「主節」、アルファベット小文字 sv によって「従属節」を示す。
- 3) 例文 (12) で示す Quirk et al. (1985: 620) も同様、*perhaps* や *possibly* の生起位置が大きな影響を与えているか否かも今後の研究では考慮する必要はある。
- 4) 「「万一～すれば」の感じで、万一の should と言われる」と説明している（江川 (1991: 257)）。
- 5) If I **should** fail, I *will/would* try again. / If we **should** take a vacation this year, it *will be* in late August. / If it **should** rain, *take* the washing in.
- 6) 澤田 (2018: 40) では「伝聞タイプ」という呼称も使用している。
- 7) 澤田 (2018) はモダリティを「根源的モダリティ (Root)」と「認識的モダリティ (Epistemic)」の二つに分けて論を展開しており、例文中の“R”はその例文中の法助動詞が「根源的モダリティ」を持った法助動詞であり、“E”は「認識的モダリティ」を持った法助動詞（として解した場合）を示している。
- 8) 澤田 (2018: 41) ではこの“rubber boots”の箇所は“rubbers”となっているが、誤解を招きかねない表現であり、またこの語を違う意味で解釈することによって文の非文性が増す可能性が否定できないため、本稿では「長靴」という日本語訳から“rubber boots”として曖昧性を回避した表現を使用する。
- 9) 古賀 (2009) では「法性副詞 (modal adverb)」を用いている。
- 10) 数値は COCA の website 上で提供された数値 (Chart 機能) を使用した。
- 11) 表内略称が示すジャンルはそれぞれ以下の通り。BLOG: BLOG, WEB: WEB PAGES, TV/M: TV/MOVIES, SPOK: SPOKEN, FIC: FICTION, MAG: MAGAZINE, NEWS: NEWSPAPER, ACAD: ACADEMIC
- 12) 『ジーニアス英和辞典 第5版』(s.v. perhaps) では、各 ModADV の表す話し手の確信度を以下のよう
に示している。possibly: 30%, perhaps: 30% 以上, maybe: 35-50%, likely: 65% 以上, probably, presumably
70% 以上, doubtless: 80% 以上, inevitably, necessarily, unquestionably, undoubtedly: 90% 以上, definitely,
certainly: 95% 以上。
- 13) 藤田 (2020) で使用された COCA, COHA はそれぞれ Full-text 版である。
- 14) 譲歩の *if* 節においては主語・動詞は省略される (s.v. if 5. 『ジーニアス英和辞典』)
- 15) *q.v.* Lakoff (1973) 等。

参考文献

- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Essex: Pearson Education Limited.
- Bellert, Irena. 1977. "On Semantic and Distributional Properties of Sentential Adverbs," *Linguistic Inquiry* 8, 337-351.
- Curme, O. George. 1931. *Syntax*. Boston: D. C. Heath and Company.
- Dancygier, Barbara and Sweetser, Eve. 2005. *Mental Spaces in Grammar: Conditional Construction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Declerck, Renaat. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Declerck, Renaat and Depraetere, Ilse. 1995. "The Double System of Tense Forms Referring to Future Time in English," *Journal of Semantics* 12, 269-310.
- Greenbaum, Sydney. 1969. *Studies in English Adverbial Usage*. Florida: University of Miami Press.
- Haegeman, Liliane. 2010. "The Movement Derivation of Conditional Clauses," *Linguistic Inquiry* 41, 595-621.
- Huddleston, Rodney and Pullum, K. Geoffrey. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jenkins, Lyle. 1972. *Modality in English Syntax*. Doctoral dissertation, MIT.
- Kruisinga, Etsko. 1932. *A Handbook of Present-Day English: Part II English Accidence and Syntax* 2. 5th ed. Groningen: P. Noordhoff.
- Lakoff, George. 1973. "Hedges: A Study in Meaning Criteria and the Logic of Fuzzy Concepts," *Journal of Philosophical Logic* 2, 458-508.
- Poutsma, Hendrik. 1928. *A Grammar of Late Modern English*. 2nd ed. Groningen: P. Noordhoff.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.
- Sweet, Henry. 1891. *A New English Grammar Logical and Historical*. Oxford: Clarendon Press.
- Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説—改訂三版—』東京：金子書房.
- 郡司利男・鈴木英一 (監訳). 1983. 『グリーンボーム英語副詞の用法』東京：研究社.
- 古賀恵介. 2009. 「認知文法における副詞の意味構造」『福岡大学人文論叢』41-3. 1095-1123.
- 小西友七, 南出康世 (編). 2001. 『ジーニアス英和大辞典』東京：大修館書店.
- 澤田治美. 2006. 『モダリティ』東京：開拓社.
- 澤田治美. 2014. 『現代意味解釈講義』東京：開拓社.
- 澤田治美. 2018. 『意味解釈の中のモダリティ (上)』東京：開拓社.
- 藤田郁. 2020. 「通時的に見る maybe と類義副詞の頻度の変遷」『立命館言語文化研究』32-2, 81-94.
- 南出康世 (編). 2014. 『ジーニアス英和辞典』(第5版) 東京：大修館書店.
- 安井稔. 1996. 『英文法総覧—改訂版—』東京：開拓社.

使用コーパス

- Corpus of Contemporary American English (<https://www.english-corpora.org/coca/>) (最終利用日：2021年3月30日)
- Corpus of Historical American English (<https://www.english-corpora.org/coha/>) (最終利用日：2021年3月30日)

